



ペキちゃんのお愛称で親しまれた我が娘は
タンゴの名曲「碧空」が名付け親

夜の幕はいつしか迫り
青い月影 窓辺に射せば
今宵も静かに 君を偲ぶ
懐かしの面影 心に描く
「泪のタンゴ」奥山毅・作詞 服
部良一・作曲 松平晃・唄 昭和
十二年)

昨日までの大雪が、嘘のように
晴れて、夜空の星がきれいに輝い
ている。窓から青い月影が入って、
私のベッドの枕元を照らすと、「青
い月影、窓辺に射せば」と、子
どもの頃に覚えた唄が出てきた。
「シヨイチーすまんが五番館まで
買物に行ってきたてくれんかい」

いつものおつかない声と違う調
子で私を呼んだ、祖父・丈太郎の
声が蘇った。
あれは、小学校五年生の夏休み
のときだった。

樺太(現サハリン)で小学校の
教員をやっていた父は、一年に一
回、夏休みには、家族で札幌の元
村(現北十四条東十一丁目)にあ
る、祖父の家へきていた。
祖父・丈太郎は当時七十六歳
どことなく乃木大将(日露戦争の
立て役者)に似た、「ママ塩頭の、
私には怖い存在の人であった。
「いいよ。なに、買いにいくの?」
「ホレ、二十銭持っていきなさい。」

一個、五銭もせんだろう。だんご
を三つ、買ってきなさい。昨日、
五番館(札幌駅前にあつたデパー
ト)で、大きな看板を出して宣
伝していた「夜のだんご」という
のを、わしもひとつ食ってみよう
と思ふんじゃ。シヨイチにもひと
つやるわ」

「わかった。行ってきます」
元村の祖父の家は、周りは窓鼻
とデントコン(馬の餌にするトウ
モロコシ)の畠の真ん中にポツン
と建っていて、当時、札幌の街で
五階建てのビルは、デパートの三
越と丸井だけだったが、その二つ
のデパートの屋上が、祖父の家の
二階からよく見えた。
この家から札幌駅までは、子ど
もの私には大変な道程である。
銀貨を二つ、半ズボンのポケット

トにしまい、夏の暑い日なんて妻
わら帽をかぶっていた。赤レン
ガの製麻会社を過ぎると創成川が
東と西とに分けて流れている。水
がきれいで泳いでいる子どももい
た。鉄道の踏切を渡れば札幌駅だ。
駅前の丁字路は市電の停留所で、
草色のチンチン電車が、一、三両
は停まって客を降りさせていた。
その停留所の前が五番館デ
パートであった。食品売り場は地
下なので、デパートの入り口の外
からも降りられるようになってい
た。降りようと思つて、ひよつと
目に入った映画の看板があつた。
この五番館デパートのすぐ近くに
ある、エンゼル館という映画館の
看板であつた。

時計・眼鏡・宝石・補聴器
(有)すけがわ時計眼鏡店
中標津町東2条南1丁目
TEL 2-2403
FAX 2-0546



金髪の外国人女優の顔が出ている。その顔の横の大きな文字を見て、ハツとした。なんと『夜のタンゴ』と書いてある。

「ありやあ！お爺ちゃん、この看板見たんだなア？」

当然、「夜のだん」などは売っているはずはなかったのである。

私も、この時初めて音楽用語のタンゴという言葉を知った。

十九世紀の後半、アルゼンチンで起こった、四分の二拍子のリズムで、この音楽に合わせて踊るダンスは世界を風靡した。日本にも昭和の初め頃上陸し、歌謡曲のスタイルにも、日本語調でない洋風の曲には多く使われるようになった。

アルゼンチン・タンゴとコンチネンタル・タンゴの二種類がタンゴの主流で、両方ともバンドネオ

ンの小気味よい刻みのリズムが、タンゴの特徴を生かしている。

「碧空^{あおぞら}」というタンゴのスタンダード曲がある。この曲が、私には忘れることのできない人生のページを作った。

昭和二十九年の春であった。

私はボリドールというレコード会社の専属作曲家という肩書きで仕事をしていた。ある日のこと、同じ作曲仲間である真木陽というピアノ弾きでもあった彼が、

「牧ちゃんーちよつと頼みがあるんだけど…」

「なにさ、陽ちゃん。暗い顔してエ…。金ならないよ。俺も借りたいくらいなんだから…」

「違う違う。実は俺、一週間ばかり田舎へ帰らなきゃならなくなつてさア」

「ホウ、そりや大変だ」

「そいで、夜やつてる銀座の店、休まんきゃならんのよ」

銀座の店というのは、クラブでやっているタンゴバンドのピアノ弾きのことであった。

「一週間、トラ頼みたいんだけどなア…。一万円出すからさア。牧ちゃんのスカイライト、今、仕事ないんだろさ」

真木陽君が働いているタンゴバンドは七人編成で、ヴァイオリン二人、バンドネオン二人、アコーディオン、ピアノ、ベースの、原孝太郎ジュニア といつて、かなり名の通ったバンドであった。彼のいう通り、私が持っていたスカイライト楽団は旅興行専門のバンドで、仕事がないときは、バンドのメンバーはどこかのバンドのトラ（エキストラという臨時雇い）をやっている。

「俺のピアノで大丈夫かなア…。タンゴにはあんまり自信ないしねエ…」

「平気平気。牧ちゃんで大丈夫だよ。頼むよオ…」

「わかったよ。じゃ、今夜から行ってやるわさ」

で、銀座七丁目にある、クラブへ一週間トラに入った。思ったほど難しい曲もなく、八時から四十分のワンステージはタンゴ曲のスタンダード、クンパルシタ、エルチヨクロ、そして当然の「夜のタンゴ」など、よく聞いている曲ばかりで気分よく終わった。二十分の休憩が終わって九時からのステージの初っ端に、「碧空」の譜面が回ってきた。この曲は私も大

好きな、誰でも知ってる曲だ。ヴァイオリンの流れも快いスタートで十六小節が終わって、十七小節、十八小節目の譜面の上に点線があり、B i s s という、私には初めて見る記号であった。英語がからつき駄目な私。なんのことがわからない。気にせずに通つていったところがである。この十七小節目から、ピアノとアコ、ヴァイオリンとの掛け合い演奏になっているのだが、私のピアノが二小節先に進んで演奏してしまっている。アコーディオンの奏者であるバンマスが立ち上がって振り返り、

「おい！ピアノ。気をつける！」

私も「ハツ」としてすぐ二小節を合わせて気がついた。あの記号のB i s s は、二小節の繰り返しということであつたのだ。ステージが終わって、二回目の休憩のとき、

「ピアノさんー変な音、出さなくてよな」

嫌味たらしいバンマスの顔。

「スイマセン。あのオ…」

「B i s s が知らなかったもんで、とはいえなかった。この日以来、一週間の間、毎日弾く、碧空

がぎこちない演奏になつてしまつ

た。だが、このおかげといつても変だが、“Biss” という音楽用語をリビートと同じ意味であるということを知ったことと、碧空の演奏をガッチリ練習させられた。そして、“碧空” という字を心の奥深く刻み込んだ。

碧という漢字は、中学生の頃、早稲田大学の応援歌“紺碧の空”で覚えていた。ベキとしか読んでいなかったが、この“碧空”のタンゴのおかげで、あおいとも、みどりとも読むのだと知った。

この年に、私は結婚し、翌年の昭和三十年に長女が生まれた。そして私は、この長女の名前を“碧みどり”と名付けたのである。

赤ん坊の呼び名をベキとしたから、誰からも“ベキちゃん、ベキちゃん”と可愛がられ、幼稚園、小学校、中学、高校、ずーっといまだにベキちゃんといわれている。

タンゴ “碧空” が生んだ女性なのだと思っている。

あれから、何十年も経っているが、最近ほとんど、テレビの音楽番組でタンゴバンドの出演など見たことはない。したがってタンゴの曲は聞けない。世の中はどんどん進歩し変化していつてるので、

音楽の流れも変わって当然なのだ。現在、若い人たちがかき鳴らしている音楽のそれはそれとして、タンゴのような、優しく、華麗な曲が日本の隅々の音楽愛好者の中で培われたおかげで、今の音楽があるのだということを忘れてはならないと思う。まあ、恐らく、どこかのダンスサークルでは、きつとタンゴが流れて踊っていることだろうとは思っけど…。

「大ババ！昨日、恵けい以い（孫娘）の卒業式だったのよ」

「おお、ベキか！そうかそうか。

いよいよ恵けい以いも高校を卒業したのかア…」

東京の長女・碧からの電話であつた。

あの“碧空”の赤ん坊の子どもが、高校を卒業したというのである。なんと月日の経つのが早いこと。

ミリーラーシド、レミレシー

私の耳の奥に、タンゴ “碧空” のメロディーが、懐かしく流れた。

テレビさえつけなければ、静かな毎日が過ぎてゆく。

寒かった冬も峠を越した。確実に、春が近づいている。